

大

学



2024

7

No.

417

時

報

| 特集 |

共同学習空間「ラーニングコモンズ」の今。

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748 2024(令和6)年07月20日発行【隔月刊】

大阪医科薬科大学



W.M. ヴォーリズ設計による
旧本館(1930～1990年)と旧解剖館(1930～1987年)



旧別館(1930年～)
国の登録有形文化財に登録されている

ボローニャ大学の講義風景を
表現したレリーフ



サイクロトロン(照射用及びホウ素薬剤製造用)

関西BNCT共同医療センター

精神的シンボルと次世代を拓くBNCT

学校法人大阪医科薬科大学は、2016年に大阪医科大学と大阪薬科大学が将来の社会情勢と両学の特色に鑑み、法人合併と大学統合によって誕生した。

本学の誇る「だいがくのたから」は主に二つ。一つは旧大阪医科大学の学舎である。旧大阪医科大学は、1927年に初の5年制医育機関、大阪高等医学専門学校として開学した。当時、西日本各地に西洋建築を手掛けていたW・M・ヴォーリズ氏の設計によって大学本館、解剖館及び別館が建てられた。インドの古代医学に因んでインド・サラセン様式の装飾や部分的タイル張り表現、個性豊かな意匠に特色がある。別館は国の登録有形文化財に登録され、現在も大学や地域のイベントに使用、本学の精神的シンボルとして今後とも永く保存される。

もう一つは、関西BNCT共同医療センターである。本センターでは、次世代がん治療法としてのBNCT (Boron Neutron Capture Therapy) の略、ホウ素中性子捕捉療法) を行っている。BNCTは中性子とホ

ウ素の核反応を利用した治療法である。がん患者の体内に投与されたアミノ酸を添加したホウ素化合物には、がん組織中の正常な細胞は反応せずがん細胞だけが取り込む。そこに中性子を照射すると8〜10ミクロンの極短飛程の粒子が発生し、がん細胞だけが破壊される。正常な細胞を傷つけずに治療できる画期的な治療法と言える。治療は原則1回、約40分の照射で終了し、通常、副作用は生じない。本法の急速な進歩は、中性子線を照射するための小型加速器(サイクロトロン)が日本で開発されたことに加え、有効なホウ素薬剤が製造されたことによる。本センターでは2020年6月に進行(再発)した頭頸部癌に対する保険診療承認を受け、これまでに国内各地から300余名の患者を治療し、完治(CR) 44%、有効(PR) 36%、奏効率は80%(6か月判定)と、頭頸部の進行(再発)がん

で非常に良好な成績を得ている。今後、本法の応用範囲拡大とともに、本センターも未永く学生らの心のよりどころとなるシンボルとなることを願う。

古代より中国で使用され、アラビア商人を經由して西方に広まり、中世ヨーロッパの航海に革命をもたらした羅針盤。表紙デザインには、社会の変化が著しい現代において、大学の“今”を映し出し、向かうべき未来をはかる指針とならん、という思いを込めています。



118	116	112	102	100	98	96	94	92	88	82
私大連ニュース		新会員代表者紹介		クローズアップ・インタビュー		加盟校の幸福度ランキングアップ《大学と子育て編》		寄稿 「私立大学のミライー研究編」		次世代研究大学の実現を目指して
執筆者・出席者の紹介(掲載順)		フェリス女学院大学／学習院大学・学習院女子大学／阪南大学／順天堂大学／共立女子大学／流通科学大学／流通経済大学／白百合女子大学		エッセイスト 森下典子さんに聞く (聞き手) 外川智恵		つどいの広場「えみくる」における子育て支援 大谷朝		「先端メディア」と「味覚メディア」が拓く未来 宮下芳明		ーソーシャルインパクトを生み出す研究政策の取り組みー 廣瀬充重／高野由希子
120 編集後記				心理臨床の現場で学ぶ子どもの育ち 山登敬之		AI時代のリベラル・アーツを目指して 中本幸一		私の授業実践と教育現場の最前線からー 授業と学術論文の「基本」 糸隆太		
						明日への試み ノートルダム清心女子大学情報デザイン学部				



時代の先へ、翔び立て世界市民。

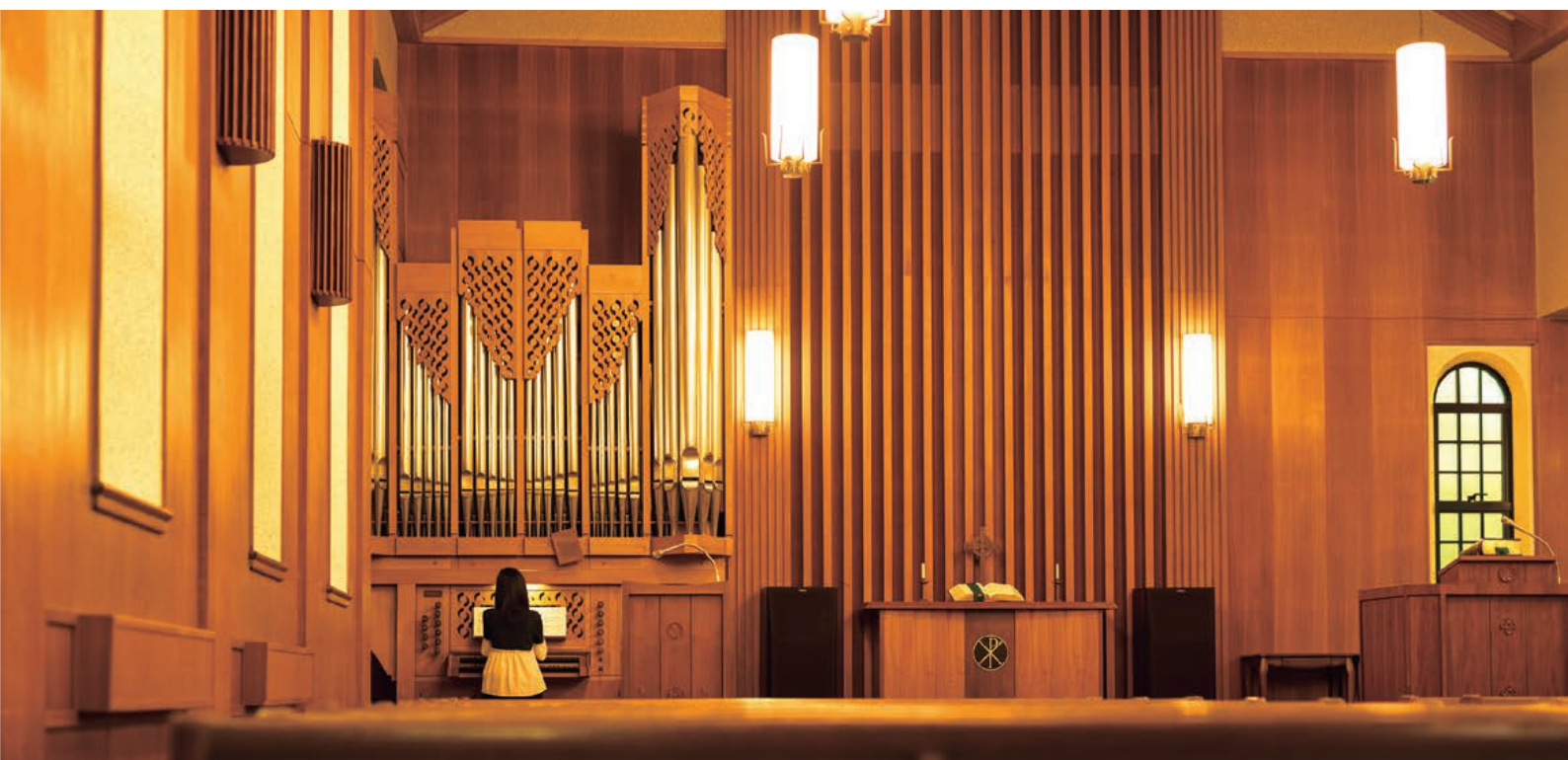


関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY





関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY



関西学院大学
KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

University Current Review

大学時報

2024.07/NO.417



社会連携が 強く求められる時代に

森 康俊 関西学院大学学長

教育、研究に次ぐ大学の役割は社会連携である、という認識が社会一般に広がりつつある。企業や団体と連携して、学生や教員が行うさまざまな取り組みは大学広報のメインコンテンツとなっていると感じる。私立大学にとって、そうした活動は現代的な宣伝材料となるだけでなく、それぞれの学校の建学の理念に基づいた、歴史あるアウトリーチ（社会に手を差しのべること）なのではないかと思う。

大学は何のためにあるのか

一楽真 大谷大学学長

1. 改めて問われる大学の存在意義

大学は何のためにあるのか。そんなことは今さら問うまでもないと言われるかもしれない。しかし、18歳人口が減少を続ける中、各大学が存在意義を改めて問われていることは間違いない。生き残りをかけた施策を打ち出す際にも、何のために生き残ろうとするのか、これが問われなければ、単に存続だけが目的になってしまう。

国家としての日本における大学は、1886（明治19）年に公布された帝国大学令のもと、帝国大学が設置されることに始まる。それが1918（大正7）年の大学令の制定により、官立だけでなく公立大学、さらには私立の大学の開学につながっていく。この大学令の第一条には「大学ハ国家ニ須要ナル學術ノ理論及応用ヲ教授シ並其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶

及国家思想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」と謳われている。もともと国家のための教育機関として期待されているのであるから、「国家ニ須要ナル學術」の教授や「国家思想ノ涵養」が掲げられるのは当然と言えば当然である。ただ、国際社会との関係の中で、日本という国の体制そのものが大きく変わっていったことは歴史を見れば明らかである。その中であって、「国家ニ須要ナル學術」も「国家思想」も時代の流れとともに変わっていくのは必然であった。言うなれば、時代の波の中で、大学が教える内容も変わらざるを得なかったのである。アジア太平洋戦争下における大学が置かれた状況は、まさにそれを表している。一面から言えば、時代に即応したということであろうが、他方から見れば、時代に翻弄され続けたと言わねばならない。

これは何も過去に限った話ではない。現代のグローバル化の中で、以前にも増して国の在り方、立場が問われている。それに伴い大学も、どんな学生を育てようとしているのか、そのためにどんな教育をしているのか、またしているか、そうしているのかが問われている。たとえば、国際貢献という一事をとってみても、何が本当に国際的に貢献することになるのか、簡単に答えが出ることはない。立場の違いによって意見も異なるし、目指すものも異なってくる。国際化という一語だけでも、経済を真っ先に思う人もあれば、環境問題を想起する人、あるいは紛争や人道支援を考える人もある。何を優先するかで教育内容は大きく異なる。そういう課題を根っこに抱えながら、各大学は自らの存立の意義を確かめつつ歩みを進めていると言える。

2. 本学が立ち返るべき仏教の精神

特に私立大学は、創立に当たって建学の理念を立てて、それに基づく教育を行ってきた。建学の理念は各大学の存在意義を明示するものであり、それぞれの大学の独自性を表している。私が在籍する大谷大学（学生時代から数えると今年で在籍48年目となる）は、仏教の精神

を根幹に据えている。仏教系というと、特定の宗派や教団の教義や歴史を教授するというイメージがあるかもしれない。確かに教義を学術的に研究する分野も設けている。しかし、何よりも大切にしているのは、仏教の精神に立った人間教育である。では、仏教の精神とは何か。

釈尊が生まれたのは今から約2500年前のインドであるが、その教えは限られた時代や地域にとどまるものではない。この世の在り様を見つめ、人間が傷つけ合うことを痛む心から教えを説いたのが釈尊である。逆に言えば、傷つけ合うことのない生き方をしているのであれば、説法に立ち上がることはなかった。「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である。」（『ダンマパダ』）これは有名な釈尊の言葉であるが、怨みによって争いを繰り返し、一人ひとりの尊さが見失われていることを痛む心が底を流れている。どんな状況にある者も、誰とも代われない、尊い存在であることを知らせるために教えを説いたのである。この意味で仏教の精神とは、すべての存在（一切有情という言葉があるように、人間だけに限らない）を大切に

にする心と言ってよい。本学の第三代学長を務めた佐々木月樵^{げっしやう}は、この仏教精神を端的に述べている。1925（大正14）年の入学宣誓式での「大谷大学樹立の精神」がそれである。大学令による認可を受けて3年後のことであつた。その中で佐々木は、本学における人格陶冶の三 motto として、「本務遂行、相互敬愛、人格純真」を掲げている。本務遂行は自分の果たすべき本務を見出し、それを遂行していくことである。その際に、関係の中でお互いに敬い合うことが相互敬愛と言われる。そして、人格純真は自分をごまかすことなく、真面目に取り組む姿勢を表している。この三 motto は、社会の中でどのような仕事に就くにしても、生きていく土台となる。現在、本学ではそれを人間学と名づけ、全学部・全学科の学生の学びの基盤に据えている。

3. 社会のために大学ができること

大学が社会の中に存在する限り、社会の要請やニーズと無関係であるはずはない。しかしながら、社会の価値観自体を問うことができるのが大学の役割でもある。社会の在り様に疑問を投げかけ、あるべき社会について探究してい

くのが大学の存在意義ではないか。過去の歴史に学び、来べき未来を見通すところに、現在何をなすべきかが決まってくる。それをせずに社会の要請に応えようとするなら、単に時代に迎合することにしかならないのではなからうか。

これは最近よく叫ばれる「学修者本位の教育」「学修成果の可視化」という課題とも重なる。学修者本位とは、大側を基本に考えるのではなく、学ぶ学生自身の側に立って教育を進めるものである。教員が一方的に語っても、学生に伝わらなければ教育とは言えないのは勿論である。また、学生自身が主体的に考え、課題を解決していく力を身につけることは、予測不可能な時代にあつて益々重要になってきている。それが成果を上げているかどうかを確かめるために「学修成果の可視化」ということも言われるのである。このこと自体を批判するつもりは毛頭ない。ただ、学修者である学生自身も、時代社会の中にある一人の人間である。時代社会そのものを見る視点をもっていないと、流れに飲み込まれることになってしまう。

たとえば、現代は何かにつけてコスパ（コストパフォーマンス）とかタイパ（タイムパフォーマンス）が取りざたされる。学生たちもその中で、早く結果を出すことに

追われ、結果が出ないことは無意味であると決めつけているように見える。人間の営みを総合的に探究する人文学はこの先も重要である。そこでは文献研究が中心となり、文献を読める基礎力が不可欠だが、コツコツと読解する経験を積み上げていくことになかなか関心をもってもらえない。理系の分野でも、いわゆる基礎研究に力を入れることが難しくなってきたと聞く。このような風潮そのものを問う眼をもった学生を生み出すのが、大学という場であるはずである。

4. 「問い続ける」ことの大切さ

本学の人間学に話を戻せば、自分が人間であることに日ごろ疑いをもつ人はいないと思う。ただ、非道な事件を目にすると、あれは人間のすることでないという感情が湧いてくる。その際、他人のことは批評できても、果たして自分が人間として生きていると断言できるだろうか。真面目であるならば、おそらく問いが出てくるに違いない。本当に人間として生きるとはどういうことなのか。そもそも人間とは何なのか。このような問いをもって自分の生き方について考えてみるのが本学の人間学で

ある。その際、釈尊の生き方や考え方、また親鸞の視点を通して、問いを深めていくことを大切にしている。その意味で、知識を身につけるとか、すぐに答えが見つかるという類の学びではない。簡単に答えが出ないからこそ、人生におけるさまざまな場面で立ち返ることのできる原点となる学びである。想定外のことに出くわした時、壁にぶつかった時、他者や自分の死に直面した時、改めて人生に向き合う出発点になる学びなのである。

答えは、誰でも早く知りたい。しかし、答えを握ると歩みは止まる。自分の答えに合わない人を邪魔に思うことも起きる。場合によっては関係を切ったり、排除したりもする。一つの答えに腰をおろすことは、世界を狭くし閉じていく。知らず知らずのうちに握ってしまったら答えを、これは本当だろうかと問う時、世界は広く開けていく。大谷大学は、何が本当に大事なのかを問い続ける大学でありたい。本学で学ぶ学生たちが、物事を見る眼をもち、問い尋ねていく姿勢を身につけることを願っている。それこそが厳しい現実の中で自分の果たすべき本務を見つげ遂行していく、たくましい生き方となって実を結ぶことにつながると考えている。